

1971年(昭和46年)5月-1972年(同47年)4月

ボウリング場建設ラッシュ

今からおおよそ50年前に日本中を席卷したボウリングブームは、社会現象と言えるほどに白熱していた。テレビでは毎日のようにボウリング番組が放送され、人気の女性プロボウラーがシャンプリーのCMに起用されるなど、まさに時代の寵児、レジャー産業の花形だった。全国各地にボウリング場が次々と建設され、その数は最盛期で約3,700カ所にも及んだ。

苦小牧もご多分に漏れず、わずか1年ほどの間にボウリング場が急増した。1971年(昭和46

年)の春までは「須貝ボウリングセンター(14レーン)」と「ハーバーレーンズ(20レーン)」の2カ所34レーンだけだったのが、5月にウトナイ観光ホテル併設の「ウトナイボウル(12レーン)」、10月に岩倉組の「トムボウル(36レーン)」、翌年2月に市内最大規模を誇る「苦小牧サニーレーン(50レーン)」と個人経営の「苦小牧中央ボウル(18レーン)」、そして4月に王子不動産の「アストラボウル(40レーン)」が開業し、計7カ所190レーンに膨れ上がる。1レーン当たりの市民数は600人足らずで、道内でもトップクラスの過密地帯となったが、それでもまだ新規建設やレーン増設の計画が持ち上がったというよう

だ。

「大都市に比べて地代も安いし、今後も人口がどんどん伸びるはずだという将

来性も見込まれたのでしよう」と話すのは、中央ボウルの創業者・中村重信さんの孫で現代代表取締役、プロボウラーでもある裕信さん。当時の新聞はこの状況を「ちよつとした過当競争気味」としながらも、「あと5年後には人口も一挙に5万人はふえる計算もあることと、ボウリング人口も急増していることから、採算は合うものとみているようだ」と業界の楽観的な展望を報じている。

実際、どんなにレーン数が増え

ても、待ち時間は一向に縮まる気配がなかった。平日でも1時間、休日ともなれば2時間以上も併設のゲームコーナーなどで時間をつぶさなければならぬ。もちろん施設は年中無休、年末年始も夜間営業を行い、ボウリングをしながら年越しを迎える客も少なくなかった。まだ小学生だった裕信さんは、正月に来場者へお汁粉を配る家族のせわしない姿を見て、「こんな感じがずっと続くのは大変だなあと子ども心に感じたという。

しかしその後、黄金時代はあつけなく終焉を迎える。1973年(同48年)のオイルショックに



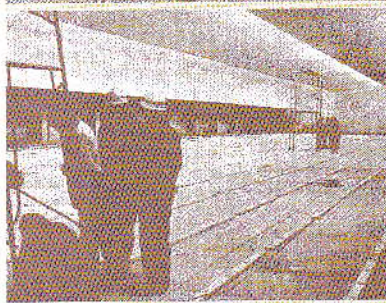
場内は連日、多くのボウラーでにぎわった

よる不況のおおりの受け、人々のボウリング熱は急速に冷めていった。利用客は激減し、もともと過剰気味だったレーン数を維持できずに、規模の大きい施設から次々と撤退を余儀なくされた。

時は流れて現在、市内には2カ所のボウリング場があるが、ブームのころから営業を続けているのは「地域とのつながりのおかげで」苦境を乗り越えてきた中央ボウル1カ所のみ。機材などは新しくなっているものの、半世紀近くを町と共に歩んできた建物は往時の面影を色濃く残し、流行は過ぎてもなお色あせないボウリングの魅力を今に伝えている。



開業1か月前の中央ボウル外観



市内最大となるサニーレーンの内装工事風景